

ICUにおける新人看護師のシャドウイング研修での学び ～レポートの分析から～

キーワード：新人看護師 シャドウイング研修 質的内容分析

C棟3階 ○水本珠美・増谷尚代・扇田百合

I、はじめに

集中治療部（以下ICUとする）における看護は、専門的知識・技術が必要とされ、その習得は難易度が高い。新人看護師が臨床現場に必要な知識・技術・態度を知り、安全・安楽な看護を実践できるようになるには時間を要する。

当ICUにおいて、新人看護師の入職9カ月頃の目標は、「2床の患者を受け持ち、多重課題における優先順位をつけ、適宜、先輩看護師に報告・連絡・相談をしながら看護実践を行うことができる」としているが、実際には困難な状況にあった。その一因として、ICUは静かな療養環境の提供と感染面への配慮のため完全個室化しており、周囲の状況が分かりにくく、新人看護師においては、自分の業務に精一杯で、先輩看護師の動きをみることが困難な状況になっているのではないかと考えた。今回、新たな試みとして入職9～11か月頃にシャドウイング研修を組み入れ、終了後に学びのレポートの提出を課した。レポート分析の結果、新人看護師は先輩看護師の行動を見ることで、日々の看護を振り返り看護実践の改善点を明確化し、さまざまな学びがあったので報告する。

II、研究目的

入職9～11カ月目におけるシャドウイング研修実施後のレポート分析から新人看護師の学びを明らかにする。

III、用語の定義

シャドウイング研修：先輩看護師の行動や、患者への実践の効果を確認しながら、無意識のうちに看護師としての所作や実践を模倣し、同一化していく行動を示す。

IV、研究方法

- 1.対象者：200X年度入職した新人看護師12名
- 2.研究期間：200Y年3月～11月
- 3.研究方法：入職9～11カ月目に1名1回、日勤帯のシャドウイング研修を実施。研修後に自由記載による学びのレポートを提出。レポート内容を研究者3名と内容分析経験者1名と共に精読し、学びに関するものをコード化した後、サブカテゴリー化を行い、カテゴリーを抽出する質的内容分析を行った。
- 4.倫理的配慮：対象者には研修前に趣旨と目的・プライバシーの確保・データの保存に配慮すること、個人的評価には影響ないことを説明し、同意を得た。また、当院の看護研究倫理委員会の承認を得て実施した。

V、結果

学びのレポートを分析した結果、184コードから、20サブカテゴリーが得られ、8カテゴリーが抽出された（表1）。

《》サブカテゴリー・【】はカテゴリーを示す。

【優先順位・多重課題の考え方】は《患者の緊急度を最優先にした優先順位の付け方》《多

表1 新人看護師のシャドウイング研修後の学び

カテゴリー	サブカテゴリー
優先順位・多重課題の考え方	患者の緊急度を最優先にした優先順位の付け方
	多重課題は根拠を持って他者へ依頼し対応する重要性
患者を理解する	患者把握の不足と患者を理解する重要性を認識
	患者理解のための情報収集の方法を知る
患者に合わせたケア	患者の希望を考慮した臨機応変な対応
	患者にとって最善の方法でのケアの提供
患者・家族に配慮したコミュニケーション	コミュニケーション方法
	傾聴と共感の態度で関わる大切さ
	患者と家族が安心できる時間と場の提供
チーム医療における協働の大切さ	患者の状態に応じた迅速な対応ができる
	周囲の状況把握の重要性
医療者間の報告・連絡・相談の重要性	コミュニケーションの少なさを認識
	医療チームとのコミュニケーションの必要性と方法を知る
	患者の変化をタイムリーに報告・連絡・相談する重要性を知る
安全な医療を提供する	急変やリスクに備えた整理や確認
	忘れず行うための工夫
	確実な技術の提供
	適切な感染管理に基づいた感染防止
看護師としての役割を再認識	看護モデルの方向性を考え自分の将来像を描く
	看護師としての自覚と責任を再認識

重課題は根拠を持って他者へ依頼し対応する重要性》で構成された。コードとして「自分の優先順位には根拠がなかった」「先輩は患者の生命に関わることを最優先にして2床持ちをしていた」などがあつた。

【患者を理解する】は《患者把握の不足と患者を理解する重要性を認識》《患者理解のための情報収集の方法を知る》で構成された。コードとして「業務をこなすことに必死で、患者の個別性を捉えようとせず、患者の入院生活がよりその人らしいものになるように配慮できていない」などがあつた。

【患者に合わせたケア】は《患者の希望を考慮した臨機応変な対応》《患者にとって最善の方法でのケアの提供》で構成された。コードとして「時間に迫われ無理に業務をこなすのではなく、患者の希望を考慮しタイムスケジュールを変えていく臨機応変な対応について学ぶことができた」などがあつた。

【患者・家族に配慮したコミュニケーション】は《コミュニケーション方法》《傾聴と共感の態度で関わる大切さ》《患者と家族が安心

できる時間と場の提供》で構成された。コードとして「家族の反応を見ながら精神面や身体面を気遣い、共感の態度で接していた」「話のきっかけがわからなかったが、先輩は何気ない会話から入ってコミュニケーションを取っていた」などがあつた。

【チーム医療における協働の大切さ】は《患者の状態に応じた迅速な対応ができる》《周囲の状況把握の重要性》で構成された。コードとして「患者の異常に気づき、緊急性があればすぐ報告し、迅速に対応することがチーム医療においてとても大切であることがわかった」「自分は周囲の状況を理解していなかったことが多かったため、状況把握が重要だと感じた」などがあつた。

【医療者間の報告・連絡・相談の重要性】は《コミュニケーションの少なさを認識》《医療チームとのコミュニケーションの必要性と方法を知る》《患者の変化をタイムリーに報告・連絡・相談する重要性を知る》で構成された。コードとして「先輩は周囲とのコミュニケーションを積極的に行っていた」「医師や周囲の

スタッフへの声かけについて、業務場面のなかでタイミングがわからず困っていたが、先輩は会話の流れで話しかけられており、具体的なコミュニケーションの方法の一つとして学ぶ事ができた」などがあつた。

【安全な医療を提供する】は《急変やリスクに備えた整理や確認》《忘れず行うための工夫》《確実な技術の提供》《適切な感染管理に基づいた感染防止》で構成された。コードとして「医療機器の配線やルートなどが混乱しやすく、リスクを考え、常に病室内は整理整頓しておく」「ルート整理は適宜行い、急変時に備える」「処置を確実に実施するために先輩がどのような工夫をしているか学ぶことができた」などがあつた。

【看護師としての役割を再認識】は《看護モデルの方向性を考え自分の将来像を描く》《看護師としての自覚と責任を再認識》で構成された。コードとして「日頃の自己の看護について振り返り、今後どうしていきたいのか、看護モデルの方向性について考えることができた」「看護師としての自覚や責任を持ち、個々の患者に応じて、より良い関わりができるようにしたい」などがあつた。

VI、考察

【優先順位・多重課題の考え方】では、先輩看護師の看護行動上の意思決定過程を見ることで、新人看護師の多くは、アセスメントが困難であつた優先順位・多重課題の考え方を学んでいる。先輩看護師の知識と観察に基づいた看護実践は、的確な看護判断のもとに行われている事を実感し、日頃行っているケアや業務一つ一つの意味を改めて認識していた。

【患者を理解する】【患者に合わせたケア】では、ICU という環境は治療が最優先となり生命維持に重点が置かれるが、その中でも患者の希望を考慮し状態をアセスメントした上で、より良いケア方法を導き出せるように関

わる事が大切であると実感していた。またそのためには患者を的確に理解することが重要であり、情報収集の方法や患者把握の重要性を再認識していた。

【患者・家族に配慮したコミュニケーション】では、ICU に入室するという危機的状況下で、関係性が築けていない患者・家族とのコミュニケーションは難しく、苦手意識があつたが、傾聴と共感の態度で関わる大切さと、限られた面会時間の中で安心できる場を提供することが大切であることを実感していた。処置・ケアに追われるのではなく、患者・家族を第一に考えた看護の大切さを学んでいた。

【チーム医療における協働の大切さ】では、ICU は患者の異常や急変時に直ちに治療を開始できるように医師や看護師、臨床工学士など多職種が協力しなければならない事を再認識していた。新人看護師はチーム医療におけるメンバーとしての役割を考える機会になつたと考える。自分の受け持ち患者をみるだけで精一杯な現状であつたが、先輩看護師は受け持ち患者だけをみているのではなく、周囲の状況把握をし、ICU 全体をとらえ、自分がどの様に動く必要があるのか考えながら行動していることを認識した。1人で患者をケアするのではなく、ICU 全体で対応することの重要性を学んでいた。

【医療者間の報告・連絡・相談の重要性】では、自己のコミュニケーションの少なさを認識し、その必要性と方法を学んでいた。新人看護師は同僚や他の医療従事者と安定した適切なコミュニケーションをとることが必要とされているが、実際には先輩看護師や医師への報告・連絡・相談が出来ていなかったり、遅れている現状があつた。ICU 入室患者の全身状態は刻々と変化し迅速に対応しなければ、生命にまで影響する。新人看護師は、先輩看護師が患者の状態や変化をアセスメントした上でタイムリーに報告・連絡・相談し、適切な看護実践に繋げている事を学んでいた。

【安全な医療を提供する】では、急変に備えた安全な医療の提供、リスクを考えた行動・対応の重要性を学んでいた。ICU入室中の患者は、高度な医療機器や薬剤を使用しており、確実な管理が求められている。患者の些細な変化を見落とさないことが、安全な医療に繋がることを実感していた。

【看護師としての役割を再認識】では、先輩看護師の多角的な視点から実践される看護を目の当たりにし、看護師としての役割を再認識することで、今後の目標や自分の将来像を描くきっかけとなったと考えられる。

入職9カ月目ごろに行ったシャドウイング研修において新人看護師は、目標に沿った視点で多くの学びがあったことが明らかになった。これは、一通りの業務に慣れ、病棟全体の流れも把握できるようになった時期にシャドウイング研修を行ったこと、さらに、ICUという閉鎖空間の中で、日頃見ることが出来なかった先輩看護師の動きを実践的な視点で見ることができ、さまざまな学びが得られたと考えられる。

Ⅶ、結論

入職9カ月頃より実施したシャドウイング研修において、新人看護師はICUで求められる知識・技術だけでなく、患者・家族を中心とした看護の大切さ、それらを取り巻く看護師、医師などチーム医療の重要性について改めて学ぶことができた。

この研究において、学びは明らかになったが、この時期のシャドウイング研修が効果的であったかは評価できておらず、入職後早期に行うシャドウイング研修と比較することで、教育効果が明らかになると考える。

Ⅷ、参考文献

- 1) 力石陽子：ウィンターシャドウイング研修の試み, HANDS-ON Vol,4 No,1 2009
- 2) 長尾佳代他：新人看護師研修にシャドウ研修を導入した教育効果, 第39回日本看護学抄録集集(看護管理), p131, 2008
- 3) 厚生労働省：「新人看護職員の臨床実践能力の向上に関する検討会」報告書 2009